

漢文学研究室

教授（博士） 澁澤 尚 [Hisashi SHIBUSAWA Ph.D. Professor]

教員の研究概要

漢字・漢文学における以下の各分野において研究をおこなっている。 ＊は主な研究成果

①老荘思想

- ＊『列子』における古帝王の楽園訪問譚について（2007）
- ＊『列子』における至人と『虚』の思想（1999）

②上古音韻学

- ＊「古音魚部豊韻考—古漢語における円球・屈短の聯綿語について—」（2011）
- ＊「列子華胥考—古漢語における異類同名について—」（2005）

③本草学

- ＊「離騷蘭芷佩服考—巫祝と香草—」（2013）
- ＊「陸游と菰—放翁詩作をめぐる本草学的考察—」（2008）

④古代神話

- ＊「昆侖と祭祀壇—『明堂』との関係において—」（1997）
- ＊『昆侖』とその同系語についての—考察（1995）

⑤農業考古

- ＊「先秦楚国農業小考—兼ねて孫叔敖の水利事績を論ず—」（2004）
- ＊「楚国農業における『火耕水耨』解釈について」（2004）

⑥漢字・漢文教育

- ＊『おくのほそ道』序文「月日は百代の過客」小攷（2021）
- ＊「故事成語教材による系統的漢文教育の試み—「推敲」から漢詩の指導へ—」（2017）

⑦その他

- ＊「羅願爾雅翼考」（2019）
- ＊「体験型学習講座『福島漢字探検隊』の7年間」（2018）
- ＊「ロバート・ハンス・ファン・ヒューリック『ディー判事もの』の挿絵について」（2015）



『福島漢字探検隊』における「古代文字で名前を」コーナー

主な所属院生の研究

①中国古代神話研究 ―四凶放竄説話にみられる神獣の原像を中心に―

研究概要

二千五百年以上前の古代神話に登場する四種の神獣の真相を明らかにするために、二つの方法を利用し研究している。一つは、文献学的考察であり、『山海経』『春秋左氏伝』『尚書』などを中心に神獣の特徴を考察していく。二つには、その神獣を表す漢字を特定する。特定の方法としては、文献学的な考察を発展させ、神獣名の漢字（甲骨文字や金文による銘文）から原像を探る。

プロジェクト実践研究

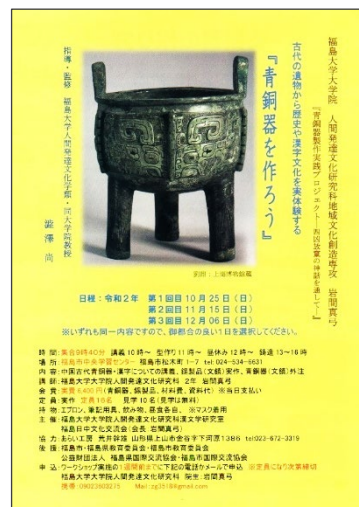
プロジェクト実践研究計画の一つは、四川省三星堆遺跡や上海博物館における研修旅行であったが、新型コロナウイルス蔓延のため実施不可能となり、二つ目の計画であった、古代の青銅器の金文



に着目し、錫製と青銅製の文鎮を作成するワークショップ『青銅器を作ろう』（3回）を開催した。小学生から80代まで、福島県以外に宮城、山形、愛知、神奈川等からの参加もあった。内容は、初めに漢字の成立や青銅器の歴史、その制作方法を講義し、実践としては木型に金文を彫り、錫を溶かして鋳型に流して文鎮を作った。後日、同型から青銅製文鎮を外注した。一般市民に漢字文化の素晴らしさを伝えることができ、また『周礼』に記載された青銅（銅・錫・亜鉛）の配合で文鎮を作り、当時の青銅色を実際に見られた点は、プロジェクト実践研究の意義にかなうものであった。



錫の文鎮と『周礼』の材料に基づいて作った青銅の文鎮



②『論語』にみえる孔子の教育観 ―子路・顔回・子貢を中心に―

研究概要

私は現職の中学校教員です。国語科の授業で『論語』の指導をおこなうなかで、教師側が『論語』そのものや、孔子とその弟子たちの人物像、彼らが築き上げていった仁や孝といった儒教思想を十分に理解していないと、『論語』の授業の充実には至らないのではないかと考えるようになりました。そこで本研究では、『論語』での登場回数が最も多いものの性格の軽率さをしばしば孔子にたしなめられる「子路」、孔子が最も評価したとされる「顔回」、言語に長じ最も秀才とされる「子貢」、この三人の弟子を中心に『論語』の各章を精読し、孔子の人間観や教育観がどのようなものであったのかを探究する「研究篇」と、古典教材として『論語』をどのように指導すべきかを探究する「実践篇」の2つの柱で研究を進めています。

プロジェクト実践研究

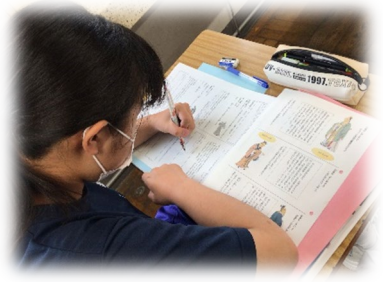
まずは小中学校の漢文教材を分析し、漢文教育の現状と問題点についてまとめました。その後、「研究篇」で明らかになった弟子の魅力や孔子と弟子の関係性を『論語』の授業にどう反映させら





れるかをテーマに指導案や資料を作り、所属する自治体の中学校の3年生3クラスで実際に授業を行いました。「敬遠」や「遠慮」など身近にある『論語』が出典の言葉を扱った導入をおこなったり、『論語』が断然面白くなる！中学生のための人物紹介」という中学生向けの資料を作成したりしながら、最終的には自分

たちが孔子の立場にたち、孔子がどのような考えで弟子たちに言葉をかけたのか想像する授業をおこないました。



主な修了生の研究

『論語』における仁愛の精神について ―古代文字の書道実践を通して―

研究成果を発表するプロジェクト実践研究展示会「書であらわす『論語』の心 “感じる論語展”」を、平成29年8月31日から9月3日まで、福島駅西口「コラッセふくしま」で開催した。展示会は、研究の成果を解説や現代語訳に盛り込んだものとし、一般的に開催される単なる書道展との違いを明らかにした。作品は、『論語』の徳目の中でも「仁」や「孝」に関する章句を中心に、孔子の人柄が垣間見られる章なども交えつつ制作した。書体に関しては、楷書・行書・草書の他、隸書・篆書・仮名、そして孔子が生きた春秋期の書体に近い金文、さらに古い時代の古代文字（甲骨文字）、木簡や篆刻にも初挑戦して作品制作をおこなった。作品点数は、屏風から色紙まで大小25点。篆刻作品や木簡を取り入れることで、展示に変化をつけなおかつ漢字そのものにも興味をもってもらえるよう配慮した。このプロジェクト実践研究は、特に優れた研究活動として高く評価され、修了時に「福島大学学長賞」が授与された。

